令和元年度　特色ある教育・経営の取組みを行う私立学校の事例集

「ともいき（共生）」が育てる地域人材

学校法人京都文教学園
京都文教大学

～京都文教大学～

京都府の南部、宇治市。最寄り駅の近鉄京都線向島駅からスクールバスで5分、京都文教大学・京都文教短期大学のキャンパスが現れます。

学校法人京都文教学園は、明治37年、仏教精神に根ざした人間教育の実践を目指して、高等家政女学校として創立されました。以来116年、現在では、大学院・大学・短期大学・高等学校・中学校・小学校・幼稚園を擁する総合学園です。建学の精神には、「三宝に帰依する心」を掲げます。三宝とは、仏、法、僧のことです。

京都文教大学校舎の外観

【建学の理念の言語化】

平成8年開学の京都文教大学は、総合社会学部、臨床心理学部の2学部を設置し、「四弘誓願（しぐせいがん）」を建学の理念とします。

・衆生無辺誓願度（しゅじょうむへんせいがんど）＝他者の幸せに貢献する
・煩悩無数誓願断（ぼんのうむしゅうせいがんだん）＝己を厳しく律する
・法門無尽誓願学（ほうもんむじんせいがんがく）＝何でも学びとる精神を持つ
・仏道無上誓願成（ぶつどうむじょうせいがんじょう）＝必ず人格の完成を成し遂げる

一つめは他者の幸福、二つめから四つめは自己の幸福に関わるものですが、他者の幸福と自己の幸福は別個のものではありません。

当大学では、学生には4年間で自己を鍛えて自分の目的を達成し、社会に出たら、それを他者の幸せに役立て、その他者の幸せを自分の幸せとすることができる人間になってほしいとの願いを込めています。

開学当初は、建学の理念を前面に出した教育を実践しようと考えましたが、四弘誓願は日常的に使う言葉としては少々長いものでした。そこで、理念を再解釈し、それを一言で表す象徴的な言葉を探しました。

自己は他者のためにも生きる。そこから、「ともいき（共生）」という言葉を考え出しました。今では、当大学におけるあらゆる活動の場面で使われているほか、地域社会にも浸透しています。

「ともいき」は、当大学を象徴する言葉となりました。

【地域連携・地域貢献の背景】

当大学では、学びの場は現場にあると考えています。このことから、地域全体を「ともいき」で創造するキャンパスと捉えて、地域の方々との双方向の交流を実践しています。高齢の方や障害を持つ方、また、子育て中の母親もキャンパスに迎え入れています。

当大学が地域連携と地域貢献に注力している理由は、地域との「ともいき」に加えて、平成19年度の文部科学省の特色GPの採択に始まり、平成26年度には京都府の私立大学で唯一、大学COC（Center Of community）事業の「地（知）の拠点整備事業」に採択されたことが大きいといいます。これまでの活動の評価と考えられます。

【地域連携・地域貢献の態様】

当大学は、現在、京都府、宇治市、久御山町、精華町、城陽市、京都市伏見区、京都市教育委員会、宇治商工会議所、城陽商工会議所、久御山町商工会と包括連携協定を締結しています。また、丹後機械工業協同組合や京都中小企業家同友会とも包括連携協定締結に向けて協議をしています（令和2年3月現在）。地元の宇治市との協定は、令和2年で10年になります。

また、「京都文教ともいきパートナーズ」として、地元企業、事業所、行政、経済団体等とネットワークを結んで、インターンシップ、企業見学に学生を受け入れてもらっています。「ともいきパートナーズ」の企業に採用される学生もいます。

「京都文教ともいきパートナーズ」勉強会の様子

当大学からは、大学附属の産業メンタルヘルス研究所が企業向けセミナーを実施しています。

このような環境のもと、当大学は地域連携の拠点となるべく、各種の取組みを行っています。例えば、「宇治市高齢者アカデミー」で高齢の方を、子育て支援室「ふんきょうにこにこルーム」で子育て中の母親を受け入れています。

さらに、サテライトキャンパスを宇治市内と京都市伏見区内に1か所ずつ設けて、ひと・文化・情報の交流拠点を創り出しています。

これらを通して、「ともいき」の輪は、地域社会に確実に広がっています。

学生に対しては、地域をより好きになってもらうための機会として、地域連携学生プロジェクト、ともいきフェスティバルなどのイベントを実施しています。また、情報誌「Ｓｐｉｒａｌ Ｕｐ」を毎月発行し、学生の地域活動を学外に伝えています。

「ともいきフェスティバル」に
学生、地元企業、行政関係者等がブースを出展

【ＫＢＵ学士力の養成】

「現場実践」と「地域連携」は、当大学の教育研究の2本柱です。

「ともいき」社会を実現できる力、どんな場面でも役に立つ力、現場で必要とされる力、自分自身と向き合う力、当大学ではこれを、「ＫＢＵ（京都文教大学）学士力」と呼んでいます。

ＫＢＵ学士力養成の土台となるのは、教育面では地域に関心を持ち、地域課題と向き合う姿勢と知性、研究面では地域課題を発見し、その要因や特性分析から解決方法を探ること、また、社会貢献面では地域の多様な担い手の育成と知的資源の社会循環の推進です。

この学士力を養成するために、初年次教育共通カリキュラムに、仏教精神（ともいきコンセプト）と地域連携に関する必修科目を置き、すべての学生がこのコンセプトに触れるしくみを整えています。

2年次教育共通カリキュラムでは、ともいきコンセプトを理解したうえで現場実習を行うべく、現場実践教育科目（ボランティア、インターンシップ、プロジェクト）を選択必修として設定し、コンセプトに基づいた実践を体験できるよう、学部横断的なカリキュラム構成としています。

【自ずと形成された教職協働】

当大学では、平成30年度に策定した第二期の中長期計画に「教職協働」を掲げました。現場主義と地域連携の実践により、自ずと教職協働が機能してくるようになったことを踏まえたものです。このことは、「ともいき」がもたらした副産物といえるかもしれません。現状では、教職協働で取り組む活動もあれば、教員と職員で役割分担をする活動もあるなど、内容により適宜対応しています。

教職協働によって、教員からは職員の仕事が、職員からは教員の行っていることがわかるようになりました。それゆえ、当大学では、ＦＤとＳＤは一体化していることが大切であると考えています。当大学における地域連携の推進部署である、地域協働研究教育センターでの「ともいき」の研究には、職員も研究員として参加しています。

京丹後市内の企業フィールドワークの成果を
ＦＭたんごでオンエア

【ＣＯＣ＋事業への参画】

当大学は、平成28年度からは、京都工芸繊維大学を代表校とする「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」（ＣＯＣ＋事業）に参画しています。地域人材を育てる推進力は、さらに強くなっています。

【取材を終えて】

今回の取材で、「建学の理念はすごく強い力を持っていると思う」という平岡聡学長の言葉が印象に残りました。当大学の教育研究活動を「ともいき」が支えていることが窺えます。

かつて、当大学には、地域に根ざした活動を展開しながらも、地域からの入学者が期待するほどの人数でなかった時代もあったといいます。やがて「ともいき」は浸透し、地域からの入学者の確保も堅調になったといいます。

現場で考え、現場で鍛え、現場で役に立つ人材、それは、地域で学び、地域で育ち、地域に貢献する人材と置き換えられると考えます。

地域の担い手はそこに暮らして、そこで働くことにあるという当大学の見解は、大学と地域がどのような関係を築いていくのか、そのあり方を示しているといえそうです。

帰り道、まだキャンパスにいる感覚でした。風の音が、「ともいき」と囁いているように聞こえてきました。

（取材）私学経営情報センター